

## 環境を創造し生きる人間の時代を考える

武内和彦. 2006. 『ランドスケープエコロジー』東京: 朝倉書店.

愛知県立大学大学院国際文化研究科国際文化専攻博士後期課程

上川夏林

本書は日本の環境学者の第一人者である著者が 1991 年に出版し、増刷を繰り返してきた『地域の生態学』を改訂した一書である。初版から 15 年が経過しての改訂、そしてさらに 15 年の時間が経った現在においても、本書が扱う地球環境と人間の関係性の本質的な検討が現実的な課題として私たちの社会に問われている。

まず第一章「ランドスケープエコロジーとは何か」、第二章「生態学的地域区分と地域環境システム」では、ランドスケープという概念の成立と変遷を概観した上で、ランドスケープ研究と生態学の接点が紹介される。

ランドスケープエコロジーは 1938 年に地理学者トロールによって初めて提唱され、ランドスケープを生態系の複合体として理解し、その空間的特質に焦点を当てる学問として、以後地理学・緑地学・生態学などが中心となって議論されてきた。ランドスケープエコロジーが目指するのは地域での環境と人間の相互関係性の理解であり、垂直的な生態環境と並んで水平的に多様な空間の間に関係性の理解が試みられる。著者によればこれは従来支配的であった個別の事象を極限まで細分化し詳細に分析を行うという研究手法ではなく、初めから全体を俯瞰する総合的なアプローチであり、自然科学全体での分析手法の転換をみることが出来る点においても学術的に意義のある試みである。中でも本書を通して著者が論じるのは、環境世界の中での人間の存在を意識し、自然と調和したランドスケープを保全・創出することで構築される持続可能な生態システムのあり方である。これは地域計画や土地利用などの実践的な取り組みにおいても取り入れられることが期待される観点であり、本書全体を通して多くの具体例から提案されている。

次に著者によれば、これまでの基礎自然研究において、人為的インパクトが大規模環境に及ぼす影響の評価が十分に議論されることはなかったという。そこで第三章「人間による地域環境の変化」では、著者自身の調査を具体例としつつ、人間集団の侵入によって自然の微細な動きが顕在化した例からその影響力の大きさを明らかにしている。例えば、長い大陸移動の結果現在の位置に漂着し、気候要因の影響を受けたことで乾燥地帯となったオーストラリアでは、水分条件による植生規定が大きく、それを克服しようとする先住民アボリジニやヨーロッパ人入植者などの人間集団による植生破壊が環境に大きな影響を与えている。さらに第四章「地球規模の土地荒廃とその防止策」で論じられる人間による非意図的な土地荒廃全般を指す砂漠化現象は、世界各地で現在でも加速している。ここでは中でも人間の土地利用のあり

かたによって土地自体が改変されてきた実態を、生態学的原理に基づいて提示することを議論の中心においている。

ここまで前半の議論では、地球環境全体の中に位置づけられたランドスケープエコロジーの全体像が明らかにされてきた。対して第五章「里山と農村生態系の保全」からの後半部分では日本の農村と都市を支える地域環境に焦点を絞り、日本、ひいては東アジア的なコンテキストの中で育まれるランドスケープが実現しうる持続可能性について検討している。近年人々の「癒しの」場所として関心の集まっている里山の半自然的なランドスケープのもつ多角的な価値の認識や大都市圏内部での生態系の再生は、動植物集団と人間が共存する豊かな国土の再生に繋がるのである。第六章「都市と国土の生態系再生」で論じられるこれらのテーマは、著者のもつランドスケープエコロジーへの考え方を読み取ることのできる部分でもあると言えるだろう。例えば先に挙げた里山に関する記述では、里山をひとつのランドスケープとして位置付けており、ランドスケープを視覚的な表象のみではなく生態系から人間の営みまでが有機的に結びついた環境全体として理解する意図が読み取れる。さらにここでは、都市内での生態系再生の実践によって生まれる自然と文化の接合面に国土の多様性を見出し、人々が生きがいを見出すことのできる豊かでバイタリティに満ちた将来をその上に創出する、というビジョンが描かれ、これは著者の目指す地域の姿そのもののように思える。

そして最後の第七章「保全・開発生態学と環境計画」では、東アジア地域の特性として都市と農村が混在していることを挙げ、両者の近接性を利用し融合させた「完全な都市」への推進可能性で締めくくられる。これは地産地消の食料供給などの自立性や循環型社会の実現、また都市住民の「教育」といった面で混在を利用するもので、今後のアジア諸国が自らの特性を理解し、独自に持続可能な社会を構築していく将来ビジョンである。世界各地で調査を実施し、様々な土地と人間を見てきた著者の経験は、こうしてアジア世界への批判的かつ実践的な視線に集約されるのである。

本書を通して強く再確認されるのは、自然の改変者であり、また同時にその一部である人間のあり方である。著者は生態系と人間の結び付く農村を「人間性回帰」の場として度々言及しており、人々が「自然」的なものに人間性を見出そうとする回帰的な本能を、論理的に説明しようとする点に独自性がある。人や情報の氾濫する現代の都市では、都心型高層マンションや郊外の宅地開発のような“快適な”プライベート空間の実現を目指した開発が盛んである。この意味で私たちの都市は、生態環境が生み出す地域環境からは完全に切り離され快適にカスタマイズされた個人空間の実現に限りなく近いところまできていると言えるかもしれない。しかし一方で、マンションのベランダで家庭菜園を楽しんだり、家の軒先をプランターで飾ったりするというような身近な場所での農や緑の実践を試みる都市住民は少なくない。ここにも、著者が訴える人間性回帰の場を求めようとする無意識の行動を見ることができる。

先に述べたように、人々は都市に住んでいようといなかろうと、自らが農や緑に支えられ、繋がっていることに全く無自覚であるほど無知ではない。この意識を覚醒させ、生態環境への自覚を促す手がかりとして、ランドスケープへの評価が考えられるのではないだろうか。著者も本

書の冒頭で紹介しているが、日本でのランドスケープに関する議論は「景観」という概念に集約され、視覚的な側面に結び付きすぎるきらいがある。この視覚偏重への批判的な考察はここではひとまず置くとしても、例えば地域を捉える視点として、本書で著者が展開するような植生をめぐる深い考察が試みられてきたであろうか。たとえ視覚的な側面からアプローチするとしても、地域のパースペクティブの中で植生が占める重要性和インパクトは高密度な都市であればあるほど大きく感じられる。農村では当たり前と思える自然の存在が、都市の内部では異質で魅力を放つ要素として存在するという可能性は十分考えられるし、実際に都市で育まれた緑が地域住民によって親しまれている例も多い。これらの要素のもつ意義の考察は、例えば評者の専門とする人文地理学ならば、これからの都市研究や地域研究によって深化されることが期待できる。生態系の生み出す自然環境の仕組みを理解し、その人間社会との結びつきを解明しようという試みが積極的に行われれば、自ずと見た目の議論を超越した環境世界の理解へたどり着くことができるのではないだろうか。そしてそのためには、従来の分野を越境した広い知見から地域を見る必要がある。本書では著者の専門である植生や生態系に関する専門的な研究データが紹介される一方で、それらの内実が環境の中でどのような現象となって発現するのかという点に重きが置かれているため、誰もが理解することができる内容に結論づけられることが多い。これは、ある分野がランドスケープという考え方に結びつけられることによる専門性の開放を表している点において示唆的である。

日本の人文科学の分野で景観の他にランドスケープという言葉が使われ始めたのは比較的最近のことであるように思われる。いわばランドスケープ研究は、未だどの分野の専売特許でもない。地球規模での環境の変化に向き合いその持続可能性を模索するということは、すなわち人間の実存と豊かな生活のあり方を問い直すことである。本書の訴える、人口増加や持続可能な都市開発などの現代的な課題と地域環境の間に新しい平衡系を確立することの重要性和緊急性は、出版から 30 年が経つ今日においても説得力のある議論として理解できる。本書を通して、この間に起こった社会の動きや環境変化の実態を正確に把握し、実践へ繋げる努力が益々必要であることが痛感される。まずは身近な地域環境としてのランドスケープ、またランドスケープエコロジーに目を向けることで、個人の世界の中に地球全体との繋がりを見出すことができるのではないだろうか。